

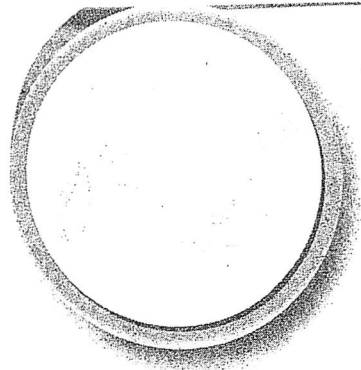
「文脈」から事件を理解

サトウタツヤ

次の、図のような文字のようなものをご覧ください。これは何に見えますか？



数字？ アルファベット？
それともカエルの笑顔？
このような図は「曖昧図形」と呼ばれ、意味を二つに決める



のが難しいものです。
では、次のようになれば、
どうでしょうか。



今度はアルファベットに読めますね。心理学的に言えば、「B」の部分は文脈によって意味が一つに決まったのであり、これを「文脈効果」と呼びます。

さて、きょうの本題は2009年に始まった裁判員裁判です。裁判員に選ばれて刑事裁判に参加する市民は、数日間事件を理解して、起訴状の内容が正しいのか（被告人が犯人か）を検討し、犯罪事実が認められるなら、どんな量刑を科すのが良いのかを裁判官とともに決定します。わ



かりやすく正確な裁判を行うには法学以外の学問の助けも必要で、心理学もその一端を担うことがあります。
「法心理学」と呼ばれる領域で扱うのは、目撃証言の信用性の問題、虚偽検出（ウソ発見）、更生・矯正心理、被害者支援などです。
今回は「情状鑑定」という取り組みを紹介しましょう。

しばしば耳にする「精神鑑定」は通常、精神科医が行います。主として犯行時の精神状態を調べ、責任能力（善悪の判断能力など）がどうかだったかを見極めるものです。
これに対し、情状鑑定は、犯行の事実と争いがなく、責任能力も認められる被告人に行われます。面接や心理テストを用い、犯行に至るまでの

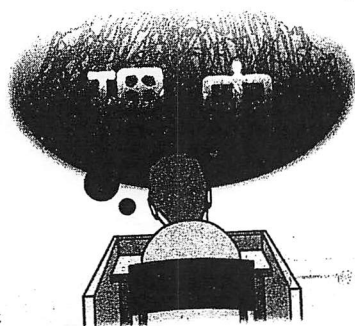


イラスト 梅田孝代

生活史も踏まえて、犯行の意味を理解しようとしています。

精神鑑定が、犯行時点の状態を推定する「点」の鑑定であるのに対し、情状鑑定は、事件を起こした人の人生を「線」でとらえます。事件の意味を「文脈」によって理解しようとする方法と言えるかもしれません。

市民の目線からすると、事件で最も知りたいのは動機です。ところが、動機のわかりづらい事件、奇妙な事件も起きます。そもそも本人にも動機がよくわからない場合もあります。だからといって法廷で「理由は自分でもわからない」と言うのと、不まじめだ、無反省だと裁判員が考え、刑が重くなるかもしれません。実際にあった事件をモチーフにして、情状鑑定のイメージを紹介しましょう。

男性が同じ職場の男性上司を殺害し、「むしゃくしゃして誰でもいいから殺したかった」と述べました。一種の無差別殺人？ でも被害者は上司ですよ。しかも仕事の指導を通じて2人の関係はどこから見ても良好でした。

心理学者の情状鑑定によれば、この男性は、自分が頼れると思った存在（父親や男性教師など）に裏切られ続ける人生を送ってきました。上司との信頼関係が良いからこそ、その破綻をおそれ、自分から関係を断ち切るため、凶行に及んだのではないかと思います。誰でもないからではなく、特定の男性上司が対象にならざるを得なかったことを鑑定は示しました。

もちろん、殺人を歓迎する社会はありません。しかし「文脈」を探ることにより、更生可能性の判断などが変わる可能性があります。

十分な情報を得て納得のいく判決を下したい、というのが裁判員の市民感覚である以上、今後、情状鑑定は確実に増えていくはずですよ。

（立命館大教授、心理学）